

誰もが働ける社会をつくる

ソーシャルファームを知って、考えて、動きたくなるワークショップ

【第2回】世界のソーシャルファーム

～イタリア・アレッサンドリア「地区の家」の活動から

2024年2月14日（水）19:00-21:00

オンライン

登壇者：

ファビオ スカルトゥリッティ

アレッサンドリア市ボルゴ・ロヴェレート地区の「地区の家」コーディネーター

多木 陽介

批評家/アーティスト

ナビゲーター：

近藤 武夫 東京大学 先端科学技術研究センター 社会包摂システム分野 教授

ファシリテーター：

紫牟田 伸子 編集家/プロジェクトエディター/デザインプロデューサー

<はじめに、「地区の家」の紹介>

紫牟田：みなさん、こんにちは。進行を努めます紫牟田と申します。

近藤：初めまして。近藤と申します。今日も私の研究室からなんですけど、先端技術研究センターというところで教員をしております。今日のはじめての方も多いと思いますが、前回も参加しておられた方もいらっしゃるよ。今日は私もすごく楽しみにこの授業を待っておりました。よろしくお願いいたします。

紫牟田：今日は、イタリアのアレッサンドリアで「地区の家 (Casa Di Quartiere)」という活動をされているファビオさんのお話をうかがいます。多木陽介さんに通訳をしていただきますが、多木さんはファビオさんの活動をよくご存知なので、まずは多木さんに「地区の家」の概要をお話いただき、その後、ファビオさんから実践の様子をうかがいたいと思いま

す。多木さん、よろしくお願いいたします。

多木: どうぞよろしくお願いいたします。今日は僕とファビオをご招待いただきまして、ありがとうございます。まず僕のほうから手短にファビオの紹介の意味をこめて、この 10～15 年くらいの中に、イタリアになぜ「地区の家」のような場所----簡単にいうと、行政ではなく、民間の市民団体や日本でいう NPO のような組織が運営している公民館みたいなもので、地域によっていろいろなかたちがあるんですけども、この 10 年ちょっとの間にどういう理由でイタリアに何十件も生まれるようになったのかということと、その中で特にアレッサンドリアというイタリア北部の人口が 10 万人もいないような小さなまちでファビオさんたちがやっている「地区の家」がどういう組織なのかということまでを僕が紹介して、その後実際に彼らがやっている活動、その中でも特にソーシャルファームというものに近いところに重点を置いて話していただきます。

この 10 年ちょっと前からイタリアで驚くほどたくさん、地域の中に入って、行政ではない民間組織（市民団体や住民グループ）がソーシャルあるいは文化的な機能を非常に多様なかたちでもった施設を自分たちでどこかを借りて運営するようになっていて、それがイタリア中で何十件とあるわけです。そういうものがなぜ生まれてきたのかという話をしていきたいと思います。

基本として、まずパブリックスペースという言葉の意味を考えてみたいと思います。日本ではふだん行政および建築家の方は「公共空間」と訳します。公共空間というと、行政が所有して管理する空間であって、我々市民はけっこう面倒臭い規則があるところをなんとか守りながら使わせていただく。主体はあくまで行政あるいは国家のほうにあるわけです。ところが必ずしも公共といいながら市民全員を受け入れるわけではなくて、例えばホームレスを受け入れない公共空間もある。それが現状です。しかし、“パブリック”という言葉の意味をちゃんと考えてみると「ピープルの」という意味ですから、“民衆の”とか“人々の”とか“みんなの”という意味があるわけです。「みんなの」という意味でパブリックを解釈すると、「パブリックスペース」はみんなの場所といえると思います。「みんなの場所」と言った瞬間に、「公共空間」とはまったく意味の違う場所になります。公共空間の場合は主体が行政でしたけれど、みんなの場所と言った瞬間に主体は住民なり市民なり、我々自身になります。実はパブリックスペースの本来の姿はこういうものです。どういう特徴があるかということ、最初に言いましたが、誰が入ってきてもいい、誰が使ってもいい、全員に対して開かれている場所です。上からこういう使い方をしなさいとか機能が決まっているわけではなくて、市民ひとりひとりがいろいろなかたちでいろいろな使い方ができる場所です。子どもたちが遊ぶために使うこともあれば、マーケットにすることもあるし、いろいろなかたちで使うことができる。その使い方はなにか規則があって何時から何時はこうだとか、規則を守りましょうということが法律できまっているわけではなく、むしろ良識というか、暗黙の了解のもとに、人間同士のやりとりの間でつかわれているものです。これはローマの有名な

広場の写真ですが、ここは、午前中はマーケット、午後になると子どもがボールを蹴ったりする場所になり、もう少し遅くなると周囲のバーやレストランがテーブルや椅子を出してきて、夜な夜な遅くまで人が戯れる場所になる。翌朝になるとこういう風景に戻るんですね。一日の時間の中でいろいろなかたちで使われる可能性がある場所。いまではもちろんこういう場所を使うのにライセンスが必要だったりしますけれど、もともとはこれもお互いの了解のもとにみんなで使い合い、管理し合っていたわけです。

これはヨーロッパだけの話ではなく、日本でもこういう“みんなの場所”と言えるパブリックスペースはいくらでもあったわけです。これは土門拳の有名な写真ですが、昔は路上でも子どもが遊んでいたわけです。みんなの場所といえるパブリックスペースというのは、必ずしも屋外だけではなくて、日本の場合は家の中にそういうパブリックスペースがあったんです。これは寅さんの映画の写真ですが、昔の日本の家屋は客間や座敷という場所がありました。これは文字通りお客さんが来て良い、近隣の人が来て良い場所です。寅さんの映画の中でも必ずこの家の住人ではないおじちゃんおばちゃんたちがこの客間にあがってお喋りしたり喧嘩したりというシーンが必ず出てきます。いまの日本の家屋にはそれがなくなってしまうかもしれませんが、昔は客間というのはセミパブリックなスペースでした。それが個々の家の中に入り込んでいたんですね。そういうセミパブリックスペースを通して近隣の人がお互いに行き交う可能性があって、その往来を通じて家と家、つまりコミュニティというのがそうやってつながっていたわけです。

ところが、20世紀になって、特に日本の場合は第二次大戦後、こういう部屋がばつとなくなってしまう。これは戦後に始まった都営住宅の間取りですが、こういう集合住宅だけでなく、戸建にも、客間という人を入れるためのセミパブリックなスペースはなくなります。リビングルームはありますが、現在のリビングルームは客間と意味がだいぶ違って、その家の住民のための場所になってしまいました。こうして完全に私的な空間だけからなる住宅が核家族のためにどんどんつくられていきました。そういう住宅政策がとられたわけですが、こうして核家族が小さな家に隔離されて外とのつながりがなくなっていくから、コミュニティが非常に小さい単位でバラバラに寸断されていってしまったんです。人々は徐々に一緒に集まる場所を失っていき、共同体が消滅していったわけです。寅さんの映画のように近隣の人が集まるシーンは、特に東京などではほとんどなくなっていると思います。

こういう傾向は日本だけでなく、ヨーロッパでは150年くらい昔から始まっており、特にイギリスやフランスでの労働者住宅というものが1850年代から、最初はイギリスのアルバーツ住宅というモデルが発表され、その後フランスでもいろいろなところから出てきます。名目は「衛生的な環境を労働者のために提供する」。でもそれによって労働者階級を先ほどの日本と同じように小規模な家族ごとに小さな住宅に押し込むことで画一的な労働者の家庭というものをデザインしてしまうわけです。こうした画一的な労働力を確保するとともに、家ごとに住民を隔離することで共同体を寸断するという目的があったんです。これは反乱の予

防という意味が大きかったんですけれども、そういうふうな歴史を踏んでこのように近所と基本的にあまり行き来しない、家の中に閉じ込められた人たちというのが、周囲の人たちと行き来する、出会う場所というのがどんどんなくなっていったんです。人間は家の中に押し込められて、住宅の外の部分、道路だったり広場だったり中庭だったりというそれまではみんなの場所であったところが、どんどん国家権力の支配のもとに置かれるようになった。そうになっていくと、我々市民たちというのは、自分たちが生きている生活環境に対する主権をどんどん失っていったわけです。で、外の、市民のために重要な広場が車の下に埋もれてしまったり、広告などいろいろなかたちでまちじゅうの空間が占拠されてしまい、本来市民が市民のために使う空間だった場所がどんどんなくなっていったわけです。

こういう歴史が煮詰まってきた時に、公共空間としてつくられる建築というのは、例えば資本の論理で消費のためにつくられた公共空間、例えばショッピングモールのようなものはつくられますけれども、本当に人と人が出会う心、あるいは考えていることを交換しあうような、つながりをつくるような場所というのが本当に社会空間の中からどんどん駆逐されるようになっていってしまったんです。自分たちが自分たちなりにちゃんと人と触れ合っていて生きていく場所がなくなっていく。そうになっていくと、社会という場所はこれまで人間がつながっている場所だというイメージを持っていたわけですが、本当に経済活動の場所、お金と商品を交換する場所になりつつあります。昔の商店といまのコンビニを比べれば明らかですが、社会全体がだんだんコンビニ化している。イタリアにはコンビニはありませんが、イタリアでも社会空間がだいぶそうになっています。そういう大きな流れに対して、市民のほうで「これは冗談じゃないぞ」と、自分たちが生きている空間を自分たちでちゃんと管理して運営し、自分たちのものとして取り戻そうという、主権奪還の運動というのかな、そういう気運が市民、特にセンシティブな市民の中に生まれてきて、「地区の家」というのはそのひとつの表現だと思います。2010年以降、いろいろな都市の中で目にみえるかたちになってきました。

アレクサンドリアというまちの場合にはもうひとつ特殊な条件があって、実は10年ちょっと前に市が破産してしまっただけです。いろいろな運営が悪かったとかいう理由もあったのですが、ちょうどリーマンショックの頃、同じような悪質な金融商品に手を出した行政がイタリアには結構あって、それで破産した市町村はけっこうあるんですが、イタリアの第一号だったのがアレクサンドリア市なんです。けっこうショックなことでしたが、いま彼らの地区の家があるボルゴ・ロヴェレート地区の中には地区の家も含めていくつもの市民団体が立ち上がって、特に社会的な弱者といわれる人たちに対する行政からのサービスは当時なくなってしまったので、それを頼りにしていた人たちが生きていけなくなるという状況が生まれました。それをなんとか守っていきこう、と立ち上がったグループがいくつもあって、彼らのように「地区の家」をつくった人もいるし、小さな規模で家賃も払えない人たちのためのコワーキングスペースができたり、移民の人たちを特に助ける団体ができたりというようなことになってきました。その時に、これがアレクサンドリアの「地区の家」の中の写

真ですが、詳しい活動についてはあとでファビオから話してもらいますが、ここは1,500m²もある大きな、昔は鋳物工場でその後倉庫になっていたところを彼らが自分たちのお金で改修して安全にも気を配る。そういう仕事を全部自分たちでやるかわりに非常に安い家賃でここを借りています。

最後に、彼自身とこの場所を運営している組織についてちょっとお話しをしておこうと思います。地区の家を運営しているのは「コムニタ・サン・ベネデット・アル・ポルト (Comunità San Benedetto al Porto)」という、もともと慈善団体で、ジェノヴァに1970年に生まれたもので、右に肖像画がある、ドン・ガッロさんという、この人はイタリアでも非常に有名だった神父さんで、マザー・テレサの男性版だと思っていただければいいんですが、本当に貧しい人とか麻薬中毒から立ちあがろうとしている人たちとかを集めてなんとか社会復帰させていこうということをもものすごく強靱な精神を持ってやっていた方です。実はファビオさんもドン・ガッロさんに助けられて立ち直ったひとりです。地区の家をアレッサンドリアでやっている人たちの一番上の年齢層の人たちは全員そうなんです。普通は弱者にここまで親身になって仕事がなかなかできないな、という仕事を彼らはするんですけれども、やっぱりそれだけ、自分たちもどん底を知っているから、弱者に対する視線が違うんですね。ちょっと真似のできない仕事をしていると思います。そういう過去はありましたが、その後教育学と社会学の学士をふたつもとった上で、ここを運営しているのがファビオさんです。

こういう仕事の中でも特に今日はソーシャルファームの話をするので、ソーシャルファームにあたる、ある組織形態がイタリアにあるので、その話を最後にして終わりにしようと思います。日本語では“社会的協同組合”と訳されている「コーペラティーヴァ・ソチャーレ」、あるいは「タイプB」と呼ばれている組織で、一種の会社形態です。上下のない会社形態で、はっきりとした目的があります。「障害者や元囚人など、就労が困難な人を雇用することで、インクルーシブな社会の実現を目的とする企業形態」と法律的に決まっています、彼らもこういうかたちで仕事をしています。

それでは、ファビオさんにバトンタッチして、彼らがいったいどんなかたちでアレッサンドリアで仕事をしているかをお話しいただこうと思います。

<アレッサンドリアでの取り組みの紹介>

ファビオ：みなさま、今日はありがとうございます。すでに何度かお会いしている方も、今日初めての方もこうやって参加していただきありがとうございます。多木さんにもずいぶん何年も前からいろいろ協力していただいて、通訳だけでなくこの中身をちゃんと伝えていただいています。私たちはまさにこういうかたちで仕事をしているということを今日はお話ししようと思います。

私たちの「地区の家」はアレッサンドリアという10万人に満たない小都市にあります。コムニタ・サン・ベネデット・アル・ポルト (Comunità San Benedetto al Porto) の本拠地

はジェノヴァにあり、私はジェノヴァで25年働いてきました。ジェノヴァは大きなまちなので、この小さなまちで働くようになって気づいたことですが、このレベルのまちだとひとつひとつの小さなことをジェノヴァよりもよりきちんとケアして管理していくことができます。いまでも私たちの経験を他の都市の人たちに伝えたり一緒にプロジェクトをやるがありますが、そういう時に自分たちからいつもスタートとして小さいエリア、東京でいえば区とかの単位で始めたほうが良いとアドバイスをしています。都市を上から眺め、小さい地区にズームインしていきます。その地区がよく見えてきた時に、その地域にどんな必要性、どんな弱点があるか、逆にどんな長所があるのかを見ていくことにします。

「地区の家」がある地域はアレッサンドリアの中で最もマルチエスニックな場所です。特にアフリカ系の人がたくさんいます。この地区は郊外ではなく旧市街地の一角で、学生や専門職の人々もたくさん住んでいます。我々の「地区の家」は非常に大きなスペースで、約1,500m²あります。そこが最初にパブリックなものとして開いた空間でしたが、その後何年もやっている間に他のスペースを次々に開いていき、現在では全部で2,800m²の空間をパブリックに使えるようにしています。

写真を見てもお分かりになるように、これはオープンする前の状態、オープン直後の状態ですが、大きな産業空間、工場などの目的に使われていたところですが、私たちが来た時にはもう何年も使われておらず、周囲の環境にとっては治安の上でも良くありませんでした。2世紀も前から人の住む住宅地でもありましたので、数千万というかなり大きな投資をして修復し、現在のスペースをつくりました。

この改修工事はエンジニアや建築家と一緒にやったのですが、その時、大事にしていたことがふたつあります。まずひとつ目は誰もが使える場所にすること。もうひとつは、改修工事に約一年間かかりましたが、多少高くついても素材や道具は地区内のお店で買おうということです。それを通して地域の人たちとつながろうということを戦略的に行なっていました。

改修工事の期間、毎日すごい数の人間がここに入出入りしていました。作業する人、材料を持ってきてくれる人たち、近所の人たち----この間に近隣の人たちと非常に深い関係を結ぶことができました。近隣の人々は経済的な活動をしている人たちもいれば住民の人たちもいます。1年間の改修工事をみなさんに見ていただいたおかげで、地区の中で我々の信頼度が高まりました。そして地域の人たちの関わりの中から、人々が何を求めているのかということもだんだんわかってきました。大きなスペースができていくのを面白がって見に来た人たちに「どういう場所があったらいいですか、何が必要ですか、何が足りないですか」としつつ質問をして、まずひとつ、移民がたくさん住んでいるので、イタリア語講座が欲しいということがわかってきました。

さらに、もう少し計画的にまちの人たちの声も聞き取りました。改修工事をしている間に住民と何度もミーティングして、エンジニアや建築家と一緒に写真やスライドや図を使ってプレゼンをしながらどんな必要があるかを質問し、住民からアドバイスをもらったりした

がら、最初のサービスのリストができていきました。

大きなスペースがあって安全に使える場所なので、だんだん市民団体や講習をする人---例えば放課後学校、カポエラ、ダンス、演劇などの講師から使わせてほしいという依頼が来るようになりました。また個人的にも自分はいまこういう生活をしていてこういうことに困っているというようなことからリクエストがだんだん集まってくるようになりました。噂に聞いて、なんとなくふらりと入ってきて Wifi を使う人、新聞を読む人というふうに、だんだんまちのたくさんの人たちがこの場所を知ってくれて、それに対するたくさんのサービスや文化的なオファーを組み立てていくようになります。

非常に重要だったことは、私たちの活動が、このスペースの中だけに閉じこもらなかったことだと思います。市民に必要なサービスをこのスペースの中で市民に与えるだけでなく、広場や道路などの外のスペースを使って、それをいろいろなかたちで市民が使っていけるように考えていったこと、これは非常に大事だったと思います。こういうかたちで非常にたくさんの市民団体、いろいろなプロジェクトに対して場所を与えることができ、コロナ前の2019年までは100件くらいのイベントをこの中でやっていました。

このようにして非常に多くの人たちがここを訪れるようになり、まちの人は初めてこの空間を発見したということになります。それまである企業が倉庫のように使って閉じたままでしたから、改めて大きな可能性のある空間が市民のために開かれたということになると思います。

先ほど話をした年100件のイベントも、自分たちで計画したのは4、5件です。それ以外はすべて他の団体からの持ち込みで、こういうかたちをとることによってかなりのバリエーションのある文化的なオファーができたと思います。

こうして多くの人たちと触れ合うようになるわけですが、地域の人たちとのこういう関係を大事に育んでいく仕事というのは時間もかかるしエネルギーもかかる。なによりも持続が大事です。そうしてきたことによって市民の人たちからも認められ、市民の人たちからの反応・反響もたくさんあると思います。

私たちがやろうとしていることのひとつは、個人個人のいろいろな必要性に目を向け、ひとりひとりの必要の中から集団的な、社会が本来的に必要としている集団的な必要性を見出して、広い範囲に私たちから与えていくことです。

例えば、イタリア語学校ですが、地域の外国人の数人から、学校の先生と話をするためにイタリア語を学ぶ必要があると聞きました。その人たちに対してだけイタリア語講座をするのではなく、そういう必要を察知した上でもっと多くの人たちに対してイタリア語の講習会を1週間午前中にやるようになりました。

もうひとつ私たちの仕事の中でも人気があるひとつが、「ネイバーフッド・マーケット」、日本語で言えば「お隣マーケット」というイベントです。いまでは年8回、かなり大規模にやっていますが、もともとはふたりのご近所が自分の家にあるいらぬものをなんとか処分したいのだけけど売る台とかを貸してくれないかな、という話から始まりました。他にもそう

いう意思がある人がいるということがわかったので、彼らと相談して2013年に最初のマーケットを行いました。アレッサンドリア市の中から毎回90家族を応募してくれたの中から選んで、300人くらいの人たちが来るんですが、いらぬものを安く売るマーケットです。こちらからは、品物を並べる台とハンガー、Wifi、コーヒーなどが飲めるバー、欲しい人には食べ物も提供しています。

こういうかたちで市民、市民団体、市のいろいろな施設、行政とつねにやりとりしながら活動してきて、市ともいろいろなレベルで関係を取りながらやってきていますから、マーケットをやる時も地区の家の前の道を完全に歩行者天国にして完全に車が入らないようにして使う許可を市からもらっています。自分たちにとってこれはとても重要なことで、道路という場所、これは普段は車に占領されていて市民は自由に使えません。車の多いイタリアではよくあることなのですが、そうではないかたちで市民が自分たちの、「みんなの場所」として道路を取り戻せる可能性があるということをマーケットをやることで気がついてくれる。そういう意味でも重要なイベントだと思います。

私たちにとってこれは重要な戦略で、パブリックスペースを自分たちのものとして取り戻すための大事な作業です。みんなの場所になってもらうためのひとつの手だと思います。ふだんは車が通っているところを車なしにしてみるとどれだけ人と人がつきあえるか、そこに何か生まれる可能性を示すひとつの手だと思います。

こうやって地域のテリトリーと市民のケアをしていくと、近くに同じような意思をもって同じ価値観を持っている人がいるということに私たちも気づくことになります。2010年、何年も放置されていた昔の農家だった建物があるコーペラティーヴァ・ソチャーレが助成金で改修してソーシャルレストランにしました。障害者の人、精神的に問題のある人、元囚人などを雇う目的で運営されているレストランです。来る人にとっては、安い値段で食べられるし、周囲が市民農園で緑も多くて素敵なところなので、しかも旧市街地からも地区の家からも近い場所にある気持ちの良いところです。そういうところをつくって、地域に生き生きした場所を提供するような仕事。これは私たちも協力していますが、別のコーペラティーヴァ・ソチャーレがやっています。

この空間を通して私たちはいくつかの目的を達成できているんですが、ひとつはいま申し上げたように緑の空間とか、屋根のある安全な空間が、それまでは市民がまったく使えない状態だったものを気持ちの良いかたちで市民に提供することができたということです。

もうひとつの目的は、先ほども言いましたけれども、ここのソーシャルレストランに食べに来る人が、もともとは安くて美味しい食事を気持ちのいいところで食べる、ということを目的に来るのですが、来ると実は非常にソーシャルな目的を持った場所で、ふだんはなかなか仕事につけない人が働いていることに気づきます。冬だと外が使えないので、一日に約180食、夏だと300食、かなりの人たちに対してソーシャルな目的のアピールをする場所になるわけです。

かなりの人数のお客さんが来るので従業員も多いのですが、いまは12人の従業員がここで働いていて、なかには障害者の方、刑期を終えた人たちも何人もいます。中には食となかなかうまくつきあえない人---過食症や拒食症などですが---そういう人たちもこういう場所でも食べ物を扱いながら精神的に治っていくという、そういう目的も果たしています。

もうひとつの同じ地区にある社会的な事業としては、私たちのコーペラティブ・ソチャールが運営している「オルトゼロカフェ」というカフェレストランがあります。ここは若い人も市民も誰でも来られる素敵な場所で、まちの中でも一番古い協会がある歴史的な広場に面しています。「オルト」というのは菜園、「ゼロ」というのはゼロのこと、要するに地産地消の野菜を使ったビーガンバー、ビーガンカフェレストランです。

もうひとつ私たちにとって大事なのは、同じ広場に面した場所に1500年につくられたきれいな回廊の中庭のある修道院です。そこにはユースホステルがあり、人が宿泊するだけでなくいろいろな活動をしています。この人たちとはいろいろな仕事を共同でやっており、深い友情でつながれた友人たちですが、彼らと一緒にアート関係、文化関係、コンサートをやったりと、中庭で実にいろいろなイベントが行われます。これらを一緒にやる時は、それぞれの職能があるわけですから、どちらが払うとかいう経済的なことでなく、市民のため、外から来る人のために、公益的なイベントをやろうという関係になっています。そういう関係がこの修道院の中庭だけでなく、ビーガンバーであれ、地区の家であれ、地域の他のいろいろな主役になる人たちと一緒にいろいろなプロジェクトが行われています。

もう10年以上前に、中小規模の都市として初めて破産を宣言することになり、その時期には当然文化的な事業に市からの助成金はいっさいなくなりました。その時、私たちとしても一種の賭けをしたわけです。助成金が出るまで待つのか、それとも自分達でなにかをしていくのか。人々の尊厳のある生活を支えたり、文化的なクオリティのある提案をしたりすること---それを私たちは選んだのです。

私たちだけでなくさまざまな市民団体が、自分たちができること、持っているものを共有した時に、ひとつひとつではできなかったいろいろな可能性が見えてきました。共有することでより豊かな提案ができるとはどういうことかということ、それぞれがスペースを持っているので、それらを使い合えるということ、そして、これまでの経験や能力、プロジェクトをつくっていく能力が一緒になった時、ひとつではできなかったプロジェクトを生み出していくイノベーションの能力を集団によって発揮することができるようになりました。

こうやって協力して、アソシエーションとかほかの会社とか市民団体だけでなく、基本的に生きていくために必要なものが足りていない人たちにも目を向けていきます。食べ物がいない人、健康管理が自分たちでなかなかできない人、治安もそうです。例えば、写真に見えているようにアレクサンドリアにはホームレスの人たちがたくさんいるのですが、特にコロナの時期にホームレスの健康診断をして回るようになり、それ以来、週に何度かパトロールをして彼らの面倒をずっと見ています。温かい毛布、寝袋をあげたり、健康の話を聞いたり

することで、自分たちだけではどこにどんなリクエストをしたらいいかわからない人たちからも、ちゃんと彼らの必要がようやく聞き出せたということもありました。

他の地区の家と違うのは、特にコロナの時にはロックダウンがありましたので人の集まる場所は閉じなくてはいけなかったんですが、私たちの地区の家は人々の健康や社会的な側面を面倒を見る人たちが働いているので、ここは開けていてもいいという許可を市や保健所からもらって、そういう人たちの必要を聞き取ったり食べ物を配布する場所になったりと、コロナの間もかなり活発に活動を続けました。

こういう経験があって、2019年のコロナ前までは本当にものがない食べ物がない、家がないなどのギリギリの必要に迫られてここに来る人たちは年 5,000 人くらいでした。コロナ以降急増しまして、2020年には12,800人、2021年には14,600人、2022年23年は安定して15,000人くらいの人たちが、毎年そういう理由で我々の地区の家を訪れるようになりました。

コロナ期にもうひとつ素晴らしかったのは、大学生くらいの若者がずいぶんボランティアとして活躍するようになってくれたことです。当時、他のまちとの行き来もできず大学も閉じてしまったので、ミラノやトリノなどの大きな都市に勉強しにいていた学生たちがみんなアレクサンドリアに戻ってきていました。その子たちが地区の家に通うようになりボランティアとなって私たち先輩からノウハウを学んで、かなりソーシャルな仕事に対して意欲も能力もある若い人が育つようになりました。

最初は2020年6月4日に、私の娘と4、5人の学生たちが地区の家の前の建物の一角に入ってきて、「大学の図書館も閉まっているのでここで勉強させてくれないか」と場所を借りました。私たちの仕事を手伝ってくれると同時に、大学生が自主運営する自習室をつくったんです。9月にはそこに登録して日々通うようになった子たちは75人いました。現在では140~150人になり、朝から夕方まで勉強しにきています。そういうところを運営し、ただ自習するだけでなく、自分達で文化的なイベントを企画したりもしています。

いまは20人くらいの25歳以下の子たちが中心メンバーで、自習室を運営するとともに、いろいろなイベントやコンサート、展覧会、トークショーを彼らが中心になって自分たちでお金を集めて運営しています。全員が地区の家のボランティアをするわけではなく、彼らのイベントだけに参加している子たちもいますけれども、私たちベテランとしては、急に若い子たちが押しかけてきて最初はとまどったところもありましたが、逆に彼らの新しい視点を学んで、私たち自身のやり方も考え直していく、という関係も生まれています。

その子たちはさまざまな文化的な・芸術的なイベントをオーガナイズする、なかなかやり手のオーガナイザーにみんな育ってきています。イタリアでは20~25歳の子たちはかなり危険なゾーンであって、特にコロナ期間中にはかなり精神的に病んだりすることが多かったのですが、逆にアレクサンドリアのこの若い子たちは、自分で自分たちの生活というか運命を築いていく、自分達の生活の主役になるということをやり返して、いまでも彼らの文化的・芸術的な提案は市の内外でもかなり評価されるようになっていきます。こうやって市にと

ってまちに対してインパクトのある活動をするようになって、公共、あるいはプライベートなファウンデーションからの助成金を勝ち取って活動に使っているわけですが、経験を積んでいく中で、それぞれがかなり立派なソーシャルワーカーになっていくということが言えると思います。

私たちの組織の創始者であるドン・ガッロ神父が私たちに教えてくれた非常に大事なことは、他人と知り合う・つきあう、知らない人たちとつきあう・知り合うことを通して、私たち自身が一人前の人間になれるんだと言うこと。たったひとりではなくて、他の人と知り合い、交わって活動して意見を交換していくこと、それによって本当に立派な人間になれる。これは必ずしも他人を助けたいからだけやっているわけではなくて、自分たちの一種のエゴイズムもあります。エゴイズムというのは人と一緒に人のために仕事をすることで自分を高めることができるという意味です。そういうことを通して、テリトリー、自分たちのまちとも深いつながりを持てます。そういう活動をこれまでもやってきました。ご清聴ありがとうございました。

<意見交換、質疑応答>

紫牟田：どうもありがとうございました。素敵なお活動ですね。ブレイクアウトルームでの意見交換の時間を持とうと思っておりましたが、時間が少なくなってしまいましたので、21時までの30分間を質疑応答にしたいと思います。聞いておきたいことがあればチャットに投げかけていただければと思います。その間に、近藤先生、まずはいかがでしょうか。

近藤：質問が多すぎてどうしようかと思っているくらいです。確かに私たちは資本主義の中で、“お客としていられる限りそこに存在できる場所”というものにあまりにも慣れすぎていて、自分が客ではなく何かをつくっていく人間にどうやってなっていくべきかわからないという人が多いのではないかと思います。前回も「雇用主になる」ということを話していて、私たち自身が「雇うことを取り戻す」ということを覚えている方もいらっしゃると思います。

そこでファビオさんへの質問なのですが、ファビオさんは「地域の中で小さなことから始めていくということが大事なんだ」とおっしゃっていました。ひとりひとりのニーズに向かい合いながら小さなところから広げていく。このことは、先ほど言った、例えば資本とか、大きな力だったり集団だったり、観光だったり飲み込まれずに、私たちでありつづけるということの重要なキーポイントなのかなと思いつつ聞いていました。そこから少しずつ広げていくということが私たち自身であり続けるということに大きく関係しているということ意識してやられているのか、それとも何かもっと違う仕掛け……私たちがお客さんではなく、私たち自身で何かを起し続ける主人公であるということのコツというのがもっと別にあるのかをうかがいたいと思うんです。小さなステップで広げ、そこを居場所とし

てつくっていくということが、大きなポイントだと私は感じたんですが、実際にそれを考えておられることがあれば教えていただければと思います。

ファビオ：まずひとつ、いつも私たちが大事にしているのは、社会的弱者といわれる人、あるいはそう思っている人たちと仕事をする時には、彼ら自身がちゃんと自分の主役になれるようにしていこう、ということです。つまり、なるべく彼らの代わりに自分が判断したり決めたりしないようにしています。これが最初のポイントだと思います。その人自身の、どんな必要があるか要求があるかをまず聞き出して、まずそれがその人だけではなくて、もっと広い社会的・集団的な必要性・リクエストにつながるのではないか。個人を対象にするのではなく、個人からスタートして集団・私たちというレベルのリクエストに広げていく。そういうかたちで答えを見つけてあげるというかたちをとっています。

近藤：ありがとうございます。

ファビオ：これはある意味かなり特殊な仕事であって、経済的な活動の中でそういう社会的な弱者にとっての雇い口を探してあげることも必ずしもうまくいかない場合もあります。まず自分達が考えるのは、そうやって仕事を探している人、社会の中に入っていきたい人たち自身の能力、彼がいったいどういう能力を持っているのか、どんなことを期待していて、どんな欲求があるのかということをやっとまず見て、それを伸ばしながら、その人たちが自分なりに自分の道を探して見出していけるようにもっていくことで、仕事も見つかり、社会の中に入っていけるということだと思います。

イタリアはこういう活動を支えるために法律があり、1990年からは、コーペラティーヴァ・ソチャーレ（社会的協同組合）というかたちで社会的弱者を雇って彼らが自立していけるように助ける仕事というような活動に対して税制を優遇したりして活動を支援する法律があります。

紫牟田：参加者の方からチャットで質問が来ておりますので、読みますね。

「活動の持続性が大切というお話がありました。続かないものは利用者にもメリットを与えられないのでその通りだと思います。持続性を保つポイントはどのようなものとお考えですか？例えば幸福感、自己肯定感、意思・思想、協調、お金、いろいろな側面があると思いますが、そうした側面から教えていただければと思います」。

ファビオ：いまいくつかあげていただいた持続性の側面ですが、理想的にはこれがみんなハーモニーをもってつながっていければいいところですが、いつもそれを実現できるとは限りません。でも先ほどお話したように税金の上で補助していただけるということがあると、これはよりたくさんの人をフォローできる重要なポイントになってきます。例えば自分た

ちがやっているバールでは、ふつうの収入感覚でいうと3～4人雇えるところですが、税制上でフォローしてもらえると、現実には6～7人雇えています。それだけでもやはり相当助かります。

それから、社会的に弱い人たちというのは、一人だけ見つめてもいろいろな問題を抱えているわけだし、ひとりだけでなくその周りの人たち----例えば家族の人たちもいるわけです。そういう人たち全員の面倒を見ていくためには、まちのいろいろなサービスと一緒にやっていく必要があります。また、もうひとつは先ほども「私から私たち」という話をしましたが、そういう社会的な貧困だつたりの弱者の方がたったひとりであるとなかなか立ち直るのはたいへんですけれど、そういう人たちをグループに入れていく。グループに入れるというのはとてもデリケートな瞬間でもあるんですが、グループで働くようになるとたったひとりではとてもできなかった、想像もできなかった力がその人に隠れているということが見えてきます。いろいろなやり方で難しいところを乗り越えて持続性を保っていくのです。

持続性というのは、ふだんは経済的な持続性のことばかりが言われますが、私は“社会的な持続性”を強調します。人間というのはただ仕事をしてお金を儲けている存在ではありません。人として他の人たちとつきあい、例えば、弱い立場の人たちにただ仕事をあげるだけではなく、一緒に食事に行ったり、遠足に行ったり、ピクニックに行ったり、いろいろなかたちで休日と一緒に過ごしたり、お昼ごはんを一緒に食べたり、そういうかたちで他の人間と一緒につきあいながら生きていくというのが本当の社会だと思います。そういう部分を大事にしておかないと、これを見逃してしまうと、例えちゃんと仕事を見つけてあげてお金を得られるようになったとしても、彼は結局地域の社会に溶け込めないでしょう。私たちが本来求めていた結果にたどり着かないこともしばしばです。そうではなく、本当に人間としてのアイデンティティや、幸福感なども大事にしながらお世話をしていくことが大事なのではないでしょうか。

紫牟田：ここで時間となりましたが、もうひとつふたつの質問があるので、時間を少し延長いたします。

ふたつめは、参加者からの質問です。「若者がコロナを機に参加するようになったことで、当初はとまどいもあったというお話がありましたが、年齢の差による不和というか軋轢がおきないように工夫されていることはありますか？日本の活動では年配者と若い人の価値観が噛み合わない。若い人が活動をやめてしまうことがあるので、コツがあれば教えてください」。

ファビオ：イタリアでもありますよ。確かに若い子たちが飛び込んできて非常にたいへんだったことは事実です。私たちのチームはソーシャルワーカーや心理学者、セラピスト、ボランティアが全員40～50代で全員あるやり方をもってやってきたわけです。そこに若い子た

ち----まったく違う知識とエネルギーと想像力をもった子たちが飛び込んできて……要約すると、最終的にはポジティブな経験でした。なぜそういうことができるかという、私たち自身もある意味でずっとやってきたやり方に慣れきってマンネリ化してきたところも当然あったわけですから、特に若い子たちだとやり方だとか自分たちが使うコミュニケーションのツールも我々の世代とは違うわけです。ソーシャルメディアにはその子たちのほうがよほど強いし、実はそこから学ぶことができました。最終的な収支決算も良かったし、自分たちにとっても、若い子たちにひっくりかえされた経験があったことで昔からやってきたことに凝り固まらず、新しい一歩を踏み出せるという意味で必要な経験だったと思います。

紫牟田：最後の質問です。

「自分が楽しいからとか、自分に必要だからという理由で活動に参加した人、例えば、不用品を売りたいと参加した人に、社会的に弱い人も含めて誰でも居場所であるという価値観や理念をどのように共有しているのでしょうか」。

ファビオ：もちろんおっしゃるように、地区の家にはいらっしゃる方はそれぞれいろいろな人たちで、いろいろな意識を持っている方たちがいます。だから最初はもうエゴイスティックに自分の必要を満たすためにだけいらっしゃる方もいるわけです。でもその時はそれでいいと思っています。でもそこで暖かく迎え入れられたら、その人はまた帰ってくる。また帰ってきた時に、私たちの活動の話をしたりします。決して無理強いをすることもしないし、自分たちが人生を教えるつもりはまったくありませんが、私たちがやっている活動を見せてあげたり、「こんなものもあるよ」という話をしているうちに、だんだん自分が主役になって共同体のために活躍したいと思う人たちも中にはできます。例えば、「お隣マーケット」ももともとは近所のおばさんたちが「家にあるものを売りたいんだけどちょっと台を貸してくれない？」というその人たちだけの要求でした。でもその時に、ちょっと待てよ、と。あなたたちだけでなく、他の人たちも巻き込んだ大きなイベントにしてはどうだ、というふうなかたちで助けてあげると、彼女たちの最初のイニシアティブが社会的な広がりを持って羽ばたいていけるわけです。地区の家という場所に来た人が、自分もここである意味で主役になって社会のために何か意味のある仕事ができるという可能性を感じてくれれば、そういうふうに踏み出してくれると思います。でも決してすべての人がそうなるとは期待できないし、期待してもいけない。そういうふうに変化を待つにはかなり時間がかかることがあります。

紫牟田：ありがとうございました。それでは、質問はこれで終わりにいたします。時間も15分ほどオーバーしてしまいましたので、ここで終わりにしたいと思います。多木さん、ファビオさん、本当にどうもありがとうございました。

ファビオ：ちょっと長くなって申し訳なかったですが、ご一緒できてよかったです。ありがとうございました。

<まとめ>

紫牟田：近藤先生、まとめの言葉をいただけたらと思います。

近藤：ありがとうございました。本当に学びが多く、いろいろなインスピレーションをたくさんいただきました。

今日の授業は、いつの間にか私たちが専門化されたものだったり行政化されたものだったり、資本化されたものだったり、私たちが知らないところで決められたルールで動いている大きな何かになんとなく沿っていきが習い性になっているような、そういうものから私たちは取り戻すことができるんだということを実践を伴ってなしていくこと、それを続けていくこと、本当に素晴らしい取り組みをファビオさんに教えていただいたなと思います。

私が印象に残ったキーワードは、「小さく始める」ということと、「目の前の人の思いや希望に向かい合うことから出発してその向こう側にある社会的なニーズを、もっと幅広い人々を巻き込むことを意識していくこと」の大切さでした。ファビオさんは何度もおっしゃっておられましたけれど、誰かを導いたりコントロールしたりするということではなく、一緒にその希望を叶えるように動いていくということが、いつの間にかやがてまち全体に持続的に広がっていく、その例を見せていただいたように思います。ソーシャルファームというのはまさに今日お話いただいたようなことにすごくつながることだと思いますので、今日の例を学びに変えながら、次の私たちのステップにつなげていくことができればなと思いました。ファビオさん、ありがとうございました。多木さん、素晴らしい通訳と進行をしてくださってありがとうございました。

紫牟田：ありがとうございました。人と知り合い、交わるということがソーシャルファームの基盤だなとつくづく感じました。

今回は4回講座の2回目で、3回目、4回目は日本のソーシャルファームの実際をリアルに聞く機会になります。ぜひ引き続きご参加いただければと思います。どうもありがとうございました。

以上